

6月の宣伝会議

MARKETING & CREATIVITY June 2003 No.643

特集 売上増大、ブランド力向上 機能する広告のつくり方

メディアスベシヤル 知られざるCSチャンネルの影響カ

△エリア特集▽北陸の市場研究

実務家が考えるブランド戦略 ホリプロ・堀社長

△広報会議▽トップの広報観

ディズニーが来た！

イベント・ビジネス創世記の鬼才たち

「あらすじ」

小谷正一（1912～1992）は、パ・リーグ創設、日本最初の民間放送の開局、20世紀最大のバイオリニスト、オイストラフの招聘という大仕事をたてつけに成し遂げた後、1960年、吉田秀雄に乞われて電通に入社。吉田が亡くなると、独立して赤坂に事務所を開設した。その小谷のもとに、大阪万博の住友グループと電力館のプロデュースの依頼がきた。

ス

ティーブシ・スピルバーグ監督の最新作、『キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン・キャン』は、物語としての面白さもさ

ることながら、目で見る1960年代のアメリカ風俗史としての側面も併せ持った佳作である。スピルバーグはこの映画の語り

始めを1963年に設定したが、それにはいささかの意味がある。

第2次世界大戦で自国が戦場となることを免れたアメリカは、無傷の工業力にモノを言わせ、戦争で荒れたヨーロッパやアジアにUSA製品を大量に輸出し、1950年代に空前の繁栄を迎えた。科学と消費の未来に何ら疑問を持たないバラ色のアメリカンスタイルは、各国に進駐した米軍を通じて、世界にばら撒かれた。

日本も例外ではなかった。モータリゼーション、モダン・デザイン、スーパーマーケット、ジーンズ、ジャズ、ロックンロール、西部劇——そうしたアメリカ文化が、50年代から60年代前半にかけての日本をよくも悪くも規定した。

1963年は、そんなバラ色のアメリカ



ヒット中の映画「キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン」。写真提供：ドリームワークス/UIP映画

式ライフスタイルに、日本が、世界が、そしてアメリカ自身が夢を見ることができた、最後の年であった。

その年の11月22日、ダラスでJFKが暗殺され、翌年5月にはイギリスから来たビートルズがビルボード・チャートの上位5位を独占。1965年からはベトナム戦争が本格化し、66年にはウォルト・ディズニ―が死去。古きよきアメリカは音をたてて崩れ出した。

1 968年、パリで始まった学生運動がまたたく間に全世界に波及し、大學生がこぞって学生運動に身を投じ始めた。その年、東京でも授業料値上げ阻止を名目とした闘争が各大学で起こり、たちの悪い熱病のように全国に広がっていった。そのピークが東大紛争だった。69年1月18日の安田講堂を巡る攻防には、政府が機動隊を投入し、学生に4千発のガス弾が打ち込まれた。

60年代前半までは、『キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン』の冒頭のデカプリオのように身なりも行儀もよかった若者が、5年後には、ヘルメットを被って火炎瓶を投げる学生か、髪を伸ばしボロボロの服を

着たヒッピーとなった。アメリカ映画からは、ミュージカル・西部劇・戦争映画といった50年代の人気ジャンルが消滅し、社会的テーマを持つニューシネマが主流となった。反戦運動とフォーク集会在全国で行われ、松任谷由実の言葉を借りれば、貧乏臭い『四畳半フォーク』が幅をきかせた。小谷正一は、そんな嵐のような1960年代の、前半を電通で、後半を個人事務所『デスクK』で過ごした。

その『デスクK』に持ち込まれた最初の大仕事は、大阪万博の住友グループ館と電力館のプロデュースであった。

白 水会（住友グループ）は、グループ各社に出したアンケートを踏まえ、展示テーマを「宇宙」に決めようとしていたが、小谷は「宇宙をやったら、アメリカやソ連にかなうはずがない」と主張して譲らず、逆に住友に「童話」というテーマを呑ませ、メインのアトラクションを、映像と人形劇を一つにした童話劇に決めた。

電力館では、引田天功（先代）による電氣を使った大仕掛けなマジックを、メインのアトラクションとした。

後に、週刊現代が行った万博のバビリオ

ンの人気投票によれば、1位は住友童話館、2位は電力館だった。小谷の判断に狂いはなかった。

小 谷は、住友童話館の人形劇と映像の総合演出を市川昆に、2部構成の第1部の人形デザインを和田誠に依頼した。昔から市川昆の映画のファンだった和田は、赤坂の小谷の事務所で市川に紹介されたとき、ひどく緊張したのを憶えていると言う。そんなふうにして、日本中のクリエイターたちが、あちこちで交流していた。

1 960年代後半、「これからの広告」は、反体制の若者をいかに取り込むかだ」と看破したのは、資生堂やキューピーマヨネーズのコピーで名を馳せていたコピーライター秋山明である。万博開催は、70年安保から若者の目を逸らせるための政府の陰謀だ、という噂が世間にまことしやかに流されていた。その噂の真偽はともかく、日本の名だたる才能が残らず万博の準備にかり出されたのは事実だった。

竹村健一は、京都大学の人文科学研究所で、梅棹忠夫、小松左京らとともに、大阪万博のテーマをディスカッションしていた。

1960年代後半、すでに人類の文明は「進

歩」だけを目指していたのでは立ち行かなくなっていた。そこでテーマは「人類の進歩と調和」と決められた。「進歩」の後に「調和」が加えられたことが、時代の変わり目を象徴していた。

小谷正一と親交が深かった飯倉のイタリア料理店『キャンティ』のオーナー、川添浩史（文化のインキュベーターとして、さまざまなイベントに係わっていた）は、富士グループ館の総合プロデューサーを委託され、富士銀行の植村政に「万博というのは、たいへんな仕事です。あなたか私のどちらかが必ず死ぬでしょう」と言い、その言葉通り、万博開催の2ヶ月前に、肝臓癌を悪化させて世を去った。

渡辺プロの渡辺美佐は、メイン・ステージのショウのプロデュースを任せられ、サミール・デビス Jr に始まって、アンディ・ウィリアムス、ジルベール・ペコー、メリー・ホプキン、ファイフス・デイメンション、マレーネ・ディートリッヒ等の海外の大物アーティストを次々に招聘した。

手塚治虫はフジパンロボット館のロボットをデザインした。

太陽の塔をデザインした岡本太郎は、基

幹施設の設計担当の丹下健三とつくみ合いの喧嘩をした。

磯崎新は、お祭り広場で人気を呼んだロボット『デメくん』を作った。

横尾忠則は、繊維館のデザインを依頼され、パビリオンをわざと建設途中の姿のまま放置するというアイディアで、一躍名を馳せた。

それまで年寄りの大御所に回されがちだったデザインや設計の仕事が、万博を契機に、和田誠や横尾忠則ら、30代前半の若い世代に回されるようになり、クリエイティブの世界で世代交代が急速に進んだ。



万博会場に『ロイヤル』が出店したステーキハウス。写真提供：ロイヤル

日本の政情は、万博の会期中も、よど号事件や70年安保で騒然としていたが、大衆は不安な現実を背を向けるかのように、半年間、お祭り騒ぎに酔いしれていた。

大

阪万博は、最終的には、3月15日から9月13日までの183日間の会期中で、6420万人の客を集めた。デイズニースーとデイズニールランドに1年間に訪れる客の3倍の客が、半年で詰めかけた勘定である。従って、万博会場は毎日デイズニールランドの6倍混雑していた。

それだけの人を集めた結果、万博は日本人の生活にさまざまな影響を残すことになった。

例えば、万博以前の日本人には、表通りから中がまる見えの食堂で食事をする習慣はなかった。が、万博会場では、初めて来た入場客に食堂の場所を手とり早く判らせるため、ガラス張りのレストランが多く作られた。ケンタッキー・フライドチキンの日本上陸第1号店が作られたのも、万博会場内であった。そうしたオープンな店の作り方に興味を持ったデイオールのネクタイ輸入商、藤田田は、アメリカのハンバーガーチェーン、マクドナルドと契約を結び、

翌年、銀座に1号店を出店した。

アメリカ館の4つの飲食店を担当した九州の外食産業「ロイヤル」は、福岡の本社内に作ったセントラル・キッチンで下処理した食材をトラックで万博会場までピストン輸送し、他のレストランが予想外の来客数に食材不足に陥る中、順調な運営をつづけた。ロイヤルは、そのノウハウを活かし、翌71年に、「ロイヤルホスト」1号店を北九州に出店している。

こうして、ファストフードとファミリールレストランのチェーンの多くが、万博の翌年に産声を上げた。

携

携帯電話の実用実験が初めて行われたのも万博会場だった。コンピュータという言葉が一般化し、全国の大学の工学部にコンピュータの専門学科が設けられたのも、万博が契機だった。

そして小谷の予言通り、万博は、日本の広告界が、アイディアやクリエイティブにもキチンと金を払うようになる、ターニング・ポイントともなった。

住友グループが、万博の経費を洗い直し、市川昆の演出料が高すぎるのではないかとクレームをつけたとき、温厚な小谷は珍し

く気色ばんでこう言ったという。

「それだけの値打ちがあるから、その金額なんや。ガタガタ言わずに払いや」

万博が終わって半年後、小谷は中央公論誌上でこうも語っている。

「正月三日、デパートは休みやし、会社は休みやし、天気はええし、みんな行くところないんで、神社行きよった。はくも暮れから正月にかけて、京都におったんで、伏見稲荷と八坂神社と知恩院と、そこらの様子を見たんやけど、日本じゅうで何ぼ動いたかと思ったら、6千万人なんやて。万博は兆単位の金使って、半年間で6千万人動かして、日本じゅうの神社は、賽銭もろって、ちつとも設備投資せんと、万博分ばかりよった」

小谷は、常に客観的な目を失わないリアリストであった。

万

博終了後、還暦を過ぎても、小谷は現役のプロデューサーとして、さまざまな企画に携わりつづけた。

万博で小谷と一緒に働いた市川昆が、1971年、股旅物の時代劇を「イージーライダー」のようなアメリカン・ニューシネマのタッチで映画化することを思いたち、

小谷のもとに相談に訪れた。制作費が600万円ほど足りないという市川に、小谷は、同じコンセプトのTV時代劇を作って、それで得た金を映画につき込んだらどうかとアドバイスし、古巣の電通に働きかけて、フジテレビでの放送の道筋をつけ、さらに、

て空前のヒット作となった。

和

太鼓のグループ「鬼太鼓座」の主宰者・田耕^{タノウ}は、万博の直後、「インターナショナルなものを作るには、真にナショナルでなければならない」と唱え、若者を佐渡島に集めて日本のよさを教育する夏

期学校を設けよう

として、小谷に支援を求めた。小谷は田の要請に応え、自分のオフィスの一角を事務所として貸し与えている。後に日本テレビで「スーパーテレビ」や「鉄腕DASH」のチーフプロデューサーとなる柏木登は、兄が

田と一緒に鬼太鼓座で活動していた縁で、大学生時代、小谷のオフィスで事務員のアルバイトをしていた。

柏木の目に映った小谷は、運転手付きのボルボに乗り、常に身だしなみが整った、ダンディな紳士だった。そんな紳士が、孫

ほども年齢の離れた柏木に、いつも対等に話してくれた。

就職活動でテレビ局を受けることにした柏木は、小谷のもとに挨拶に訪れたとき、テレビに対する小谷の屈折した思いを感じたという。柏木はこう語っている。

「草創期、テレビ局は、熱い運動体でした。熱い運動体が事業体に変質してゆくとき、熱い分だけ離脱してゆく人がいます。小谷正一は、ずっと熱い運動体でありつづけた人だったと思います」

日本テレビに入社後も、相談ごとがあると、小谷はいつも気軽に会ってくれた。会えば必ず励まされ、会った後は必ず元氣になったとも言つ。

小

谷から励まされたテレビマンは、柏木だけでは足りない。1970年にTBSから独立して、日本初の独立テレビ・プロダクション、テレビマン・ユニオンを設立した萩元晴彦も、小谷の支援を受け、励まされつづけた者の一人である。

テレビマン・ユニオンには、1979年、67才の小谷が、同社の3人の新社員のために講演を行ったときのテープが残っている。そのテープで、小谷は3人の若者にこ



フジテレビの連続時代劇「木枯し紋次郎」(1972年)写真提供:C.A.L

俳優座を造反して辞めたばかりの中村敦夫という俳優を、主役候補として推薦している。市川崑監督、中村敦夫主演による時代劇「木枯し紋次郎」は、フジテレビの連ドラとして1972年1月から放送開始。最高視聴率32.5%を記録し、時代劇とし

んな話をしている。

「大衆を軽蔑して、俺はこうだけど大衆はこうなんだと、自分だけグリーン車に乗ってときどき普通車に移ってくる、そういう考えやなしに、大衆が思っておること、欲しがっていることは、同時に俺の欲しがっていることやと、そういう自分を作っているかなきゃいかんわけよ」

ス

カバールの『Foodies TV』のプロデューサー、矢幡聡子は、1982年、ジュネーヴに留学中に、展示会の仕事で同地を訪れた小谷の通訳を務めた縁で、帰国後、小谷の事務所就職した。

職種はプロデューサー。いきなりデスクを与えられ、「好きにやれ」と言われた。そう言われても何をしていいかわからず、見よう見まねのうちに、『エリート』のモデル学校を日本に招聘する仕事や、イタリアで女性向け下着を作る仕事を、矢幡は自分で開拓していった。

矢幡が見た小谷は、小柄で痩せていて、威圧感を感じさせない老人だった。が、無類の話し上手で、ひとたび話し始めると、あたりにオーラが漂ったともいう。

70才を超えた小谷は、時には若い矢幡と

話し込むこともあった。ディズニーとエジソンの話を好んでしていたという。

時

代は、バブル絶頂期にさしかかった。小谷のもとには、その名前の威光を



柏木登
日本テレビ・人事部長



矢幡聡子
Foodies TV・プロデューサー
食雑誌「ARIGATT(アリガット)」編集主幹

借りた者から、あいかわらずさまざまな企画が持ち込まれたが、詐欺まがいの話も多く、実った仕事は少なくなった。

小谷が手がけた最後の大きな仕事は、東京国際映画祭のゼネラル・プロデューサーであった。小谷は、映画祭のシンボル・マークのデザインを「まこちゃん」と呼んで終生

かわいがった和田誠に依頼している。

最晩年には、萩元晴彦が『小谷節を聞く会』という集まりを毎月主催し、小谷の飄々とした柔らかな関西弁を聞きに、多くのヒトが集まったという。

そして、1992年、小谷正一は80年の生涯を静かに閉じた。

日

本テレビの柏木登は、大学時代に小谷の事務所でアルバイトをしていたとき、小谷からはそつとこう話しかけられたのを、今でもよく憶えている。「柏木君、21世紀の最初の1日って、どんなやろ。残りの人生と引き換えに、その1日だけでいいから、見てみたいと思っねん」

21世紀の最初の1日、つまり2001年1月1日は、今から2年4ヶ月前、われわれの上をどうと言うこともなく平凡に過ぎ去っていった。小谷が人生と引き換えにしても見てみたいと言ったその日、あなたはどこで何をしていたろう？ それは意義のある1日だったろうか？ (つづく)

(文中敬称略)

馬場康夫 「ぼば・やすお」

ホイチャョイ・プロダクションズ代表